
抜け道 裏道 人の庭

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抜け道 裏道 人の庭

【NZコード】

N4325D

【作者名】

c o k o l y

【あらすじ】

僕はある日出口のない庭に迷い込み、そこに住む美しい婦人と仲良くなつた。それから何度もその庭を通り、婦人と話をしたりして庭でのひと時を楽しむことが出来た。

草むらから人が出てきた。知らない人だ。女性だった。

女性は明るいクリーム色のスーツを上下に着込んでいて、それが前の日に会った恋人の友美のものととてもよく似ていたので、僕は一瞬彼女が出てきたのかと勘違いした。

そのとき僕は前日に彼女に言われた言葉を頭の中で反芻していて気の抜けたタイヤのような状態で歩いていたので驚いてしまった。僕は思わず立ち止まり、草むらから出てきた彼女と目が合った。

草むらはいろんな種類の雑草が入り交じっているようで背丈が高く、濃く深く茂っていて、奥がどうなっているのか分からなかつた。そこは以前から僕にとっては謎の場所だつた。この道は僕の散歩コースになつていてよく通ることがあるのだけれど、この草の壁には区切りというものがなく、明らかに住宅街の一つのプロックの半分以上を占有しているはずなのに、どこにも入り口を見つけられずに居たのだ。

その草の壁の一カ所に少し窪んだところがあつて、そこから彼女は出てきた。

実は以前にも似たような光景を何度か目にした事があつた。そのとき見たのは毎回別の人で、いざれも草むらの中からボツという感じで道に現れたのだ。

それが一度や二度ではなかつたから、僕はこの草むらの中にひとつとしたら知つていてる人だけに分かる秘密の抜け道のようなものがあるのかもしれないと思つていた。それでも今まで中に入る事が無かつたのは、単純に草まみれになつて服が汚れたり枝に引っかかつてシャツが破れたりする事を考えてしまつていてからだつた。

先ほどの彼女は僕に気付くと何故か気まずそうな表情を見せて軽く頭を下げ、足早に僕の横をすり抜けて去つて行つてしまつた。

僕は気になってしまった。その時の女性の表情はこれまで僕が見てきた草むらから出てきた人たちと同じような不可思議な空気を宿していたのだ。

彼女が出てきたその窪みの中を覗き込んで見てみたけれど、外からはその深い闇の中がどうなっているのかまでは分からなかつた。特に他の用事もなく、いつものようにただ暇を持て余してその辺をぶらぶらと散歩していただけだつたこともあつて、僕はその時に起こつた些細な好奇心に従つて、その草の壁の中に足を踏み入れた。しかしそのどこまでも続くよつに思われた暗い草むらの茂みは、あっけなく終わつた。僕が一步、二歩と踏み入れただけで闇は晴れ、僕は壁を抜けた。そこは広々とした洋風の庭園だつた。

思わず展開に僕は思わず振り返り、たつた今通過した草むらを見た。外側から見ただけではただの草むらに見えたそれは、内側から見るときれいな平面になるように刈り取られた植栽だつた。僕は植物にはまるでとんと詳しくはなかつたから、その植栽がどんな種類の植物なのか分からなかつたけど、おそらく外側の方はこの植栽の木々と他の雑草とが入り交じつてあのような鬱蒼とした雰囲気を作つていたのだろう。とにかく、今いる場所から見た草の壁は非常に手入れの行き届いた庭園の一部として完璧に機能していた。

表と裏の余りの違いに戸惑いはしたもの、ずうつと疑問に思つていた謎の場所が外側の見た目とはまるで違う姿をしていた事は、僕を妙に納得させてくれた。言葉にするなら、「こうでなければ」というような感想を持つたのだ。

庭園は、細長く縦に伸びていた。細長いとは言つても全体的に敷地の面積が広いので狭い方の辺でもテニスコートを一つ縦にしておりが来るぐらいの幅がある。足元にはよく刈り取られた芝生がしつかりと根付いているようで、田の届く限りその縁は続いていた。右手の前方、僕の立つている位置から一百メートルは離れているだろうか、そこに平屋の建物が見える。古いアメリカ映画にでてくる

る田舎の屋敷のような建物で、角がしつかりとしていて余分な装飾は無く、全体的に質素な空気が漂っている。とは言えそれは敷地の広さから考えれば目の錯覚なのかもしれない。ただ造りが単純なだけ近付いて見てみればそれなりに迫力のある大きさの建物で、そこまで行つたら僕はその家を豪邸と表現する事になるのかもしだい。

とにかくその家と僕の間には広い広い芝生の平野があり、それはもうすぐにでもそこに寝転がつて「ゴロゴロ」とひなたぼっこでも樂しみたくなるような見事な芝生だった。植栽はその平野をぐるりと長方形に囲んでいて、時にはその囲いの前に少し空間を空けて背の低い木を刈り込んだぬいぐるみのような人や動物の形をしたモニメントが飾つてあつたりしている。

空中には遮る物がほとんど無いため、芝生の上には陽の光が燦々と降り掛かっていた。僕の視線の進む先には何のために置かれているのか、芝生の一角に白く塗装された木製のテーブルと椅子が四人分、テーブルとセットで並んでいた。その一つ一つの配置があまりにもバラバラなので、僕はそれが何かのためにそこに置かれたという気がまるでしなかつたのだ。

「あらまあ、いらっしゃいませ」

僕はいきなり背後から話しかけられて肝の縮む思いをした。ここに入つてからすぐにこの場所が明らかに誰かの所有する土地で、僕はただの好奇心でこの場所に忍び込んできたのだという事を頭のかたすみで少しづつ考え始めていたところだつたのだ。どうのこうの言つたところで今の僕の状況を一言で表すなら、ただの不法侵入者だ。ただこの場に居るという事だけで法的に咎められても仕方が無い状況だ。

振り返ると僕の背後の空間には人は居なかつた。しかしそく見回してみると僕の左手側の植栽を刈り取つている婦人の姿を認める事が出来た。婦人は右手に剪定ばさみを持って半身になつてこちらを見ていた。たつた今振り返つて僕に気付いた、という感じだ。その

時まで婦人の姿にはまるで気付かなかつた。

「じゅつくりどうぞ。あちらのテーブルにはお茶もありますから」
婦人はそういうとくるりと背を向けて、植栽にはさみを入れ始めた。

「あ、あの、すみません。勝手に入り込んでしまつて」

僕がそういうと、婦人はまたこちらを向いた。

婦人はあたまにつばの広い日よけの帽子をかぶつていて、上は薄手の白いシャツ、下も白い綿のパンツだつた。一見して動きやすそうな格好をして、庭作業には手慣れたものを感じさせた。彼女の白に統一された出で立ちは芝生の縁とよく噛み合つてゐると思つた。

「ここを通る方は皆さんそうやって恐縮なさるけれど、気になさらなくて結構ですわ。そもそも入り口が無いんですもの。入つて来られた方は歓迎致します。きっと好奇心のお強い面白い方でいらっしゃるでしょうから。わたくし、楽しい人が好きなんですよ」

婦人はそう言つと近くにあつた植栽の枝の先に剪定ばさみを引っ掛け、僕の方に近寄つてきた。かと思うと僕の手前でゆつくりとカーブを描きながら進路を変え、「さあこちらへ」と手招きするようく軽く伸ばした右の手のひらを僕の方へ見せ、屋敷の方へと向かつて歩き出した。そう言つた婦人の一連の動きは自然ではあつたもののとても洗練されたものに見えて、この人はきっと裕福な家庭に生まれ育ち、長い年月をかけてこんな優雅な仕草を身につけたのに違ひないと僕は思つた。

それにしても、入り口が無いと言う事をはつきり言つた。という事は意図的に入り口を作つていないと云う事だ。

いつたいなぜ？

僕は婦人に釣られるように後を追つて歩いていた。婦人はさつき僕が見つけたテーブルのところで立ち止まり、僕に椅子に座るよう、無言の仕草で促した。ひょっとしたらこの人は、言葉なんか話さなても語るべき事を仕草だけで伝える事が出来るのかも知れない。一つ一つの動作にフェルメールの絵画のような、見ていて一瞬はつ

とするような雄弁な響きが含まれているように僕には思える。そう、婦人の事だけではなく、ここはとても絵画的だ。絵画的な庭園だ。止まっているのに、動いている、そんな感じ。

初めバラバラに置かれていたテーブルのセットは、婦人がほんの少し椅子を動かしただけでどこかのサロンの一角のような落ち着きのある雰囲気に変わった。

「少し時間を下さいな」

婦人はそう言うと僕に、座つていていいから、と仕草で示し、屋敷の方へと一人で歩いていった。

どうやらこのテーブルはこの敷地のちょうど中心の辺りにあるようだった。僕はひとりでこのだだつ広い敷地の中に取り残される自分の姿を考えてみた。僕は普通に散歩をしていたはずなのだ。たつた一步、いつもと違うところに足を踏み入れただけで何だか遠い別世界のような場所に来てしまった。これでもし地面に穴がないで、それが不思議の国なんかに繋がっていたら、まるつきりおとぎ話の世界だ。

僕の腰掛けた椅子は背もたれが両肩を十分に包み込めるほど広く作られていて、僕はそこに背中を預け、あたまを後ろに倒して首の力を抜いた。

空はちぎりとつた綿飴のような雲が一つ浮かんでいるだけで、よく晴れていた。「雲一つない」と表現してもおかしくない空だった。僕は仕事と、彼女の事を考えた。今頃みんな、何をしているだろう? どうしても仕事をする気が起きなくて会社を休んでしまったけれど、まあそれはいいとして僕は彼女に言われた事が気になつて仕方が無かつた。

両手をいっぱいに空へ向け、背中を反らせて伸びをした。一瞬首周りの血が動いて、目の前が真っ白になつた。

「ああ」

そんな声が思わず漏れて、僕は口だまりの中で何かが解放されないと感じた。僕は椅子から立ち上がり、ふらふらとテーブルの周

団を歩いた。そうして周りを見ていると、現実から遠く離れていく感じが徐々に増幅していく。

抜け道裏道人の庭。

親切おばさん「さあどうぞ」

戸惑いながら僕はゆく。

ゆけどもゆけども庭の中。

何とはなしに僕はそのような事をつぶやいた。そこに拍子のよくなものを混ぜ合わせながらロザさんで歩いた。少し歩いたところでしゃがみ込んで地面に手を置き、手のひらに生まれの感触を味わわせた。そうしていると煩わしい事やあれこれと終わり無く考えている事が吸い取られていくような錯覚に陥る。

心地よい墮落。深い緑。いい季節だ。

「お茶が入りましたよ」

いつの間にか婦人がテーブルの上に紅茶を用意し終えていて、僕に呼びかけた。婦人がそこに来るまで、僕はその気配すら感じ取る事が出来なかつた。

しかし僕はもうそんな婦人の静かな動きに驚く事は無く、この場にすっかり落ち着いて馴染み始めている。

僕が席に着くと婦人は僕の前にカップを差し出し、ポットから紅茶を注いだ。テーブルの上に置かれたティーセットはけっこう細やかな模様が描かれ、さりげない金彩が施されている。それはただの貼り付けられた金箔だつたかもしれないけれど、僕には判断がつかないし、それがどつちだつたところで、婦人と同じ空間にあるというだけで上質なアンティークとしての価値を持ち合わせてしまうような気がした。

「よかつたわ」

と婦人が言つた。僕はティーセットに気をとられていて半分聞い

ていなかつたので「え？」と聞き返した。

「ここで落ち着いて頂いている様子なので」

「ええ、いい場所ですね」

僕がそう言うと婦人は顔全体をゆっくりと動かして笑顔になつた。僕はこのとき初めて婦人の顔をよく見る事が出来た。ある程度年齢を経た人ではあるのは間違いないのだけれど、その前提からすれば彼女はとても若く見える。婦人は体中の皮膚から溢れ出るような活力があつて、オーラが出ていると言えばいいのか、実際何歳かと正確に考えようとする分からなくなるタイプの人だと思えた。

「何だか、自分でも不思議なんですけど、僕はここにいると何かがしつくりと来る感じがします。来たばかりでこんな事言うのも変な話なのかもせんけど」

「ありがとう」

婦人は僕に礼を言った。婦人はまた顔を動かしてさつきとは違う笑顔になつた。そうすると婦人の瞳がすうっと深みを増した。僕は恥ずかしいような照れるような、なんだか変な気分になつた。

「お名前を伺つてもいいかしら？」

「ヒロミです。薩川博己」

「あら偶然ね。私の名前もヒロミなの。古瀬川裕美」

「本当ですか？　じゃあ、これからヒロミさんと呼んでもいいですか？」

「あら、先を超されちゃつたわ。私がそう言おうと思つてたのに」「お互いにヒロミと呼ぶって事でいいんじゃないですか？」

「でも、そうすると会話がややこしくならないかしら」

「そうでもないと思いますよ。僕がヒロミさんと言えばあなたの事だし、あなたがヒロミと言えば僕の事だ。簡単でしょ」

婦人は僕を見る目をさつきより少しだけ大きくした。そしてまた違う笑顔を見せてくれた。その笑顔は僕に「じゃあ、そうしましょう」と言つていた。

その日から僕はこの広い古瀬川邸の敷地の中に足を運ぶ事が多くなった。ヒロミさんがぜひそうして欲しいと言つてくれて、僕がそうすると本当に喜んでくれたからだ。おまけに、いくらでも自由に通つていつてくれていいとまで言つてくれた。もともと散歩コースだつたのに加えて、ヒロミさんの家の中を通りしていくといくつかの曲がり角を省略する事にもなつたので、散歩以外の時でも僕にとっては都合が良かつた。僕はこの家を囲む外から見たら鬱蒼とした雰囲気の草むらの中に草をかき分けて入り込み、反対側の草の壁から出て行くのが、回を重ねるごとに普通の事として自分の中に消化され馴染んでいくのが分かつた。

時間があつて僕がヒロミさんとお茶を一緒に楽しむ時には、彼女に言われた事について相談したり、仕事で悩んだりしている事などを相談する事もあつた。

ヒロミさんと話していると僕が抱えている悩みや不満の多くが、その会話が終わる頃には何もかも大した事ではなかつたように思える、というのが常だつた。それは僕にとってはとても不思議な事で、つこちつきまであれやこれやと頭の中をうろつき回つていた問題は、ヒロミさんを通して浄化され、澁みない清涼な流れとして僕の中に残る事になつた。

何回かそうやってじつくりと話す機会はあつたのだけれども、僕はまだヒロミさんの年齢を聞いた事が無かつた。この人に年齢なんか関係ないのだと思えたし、それを知つたところで一体何になるのだろう? とも思つた。でも、この美しく清楚で上品な女性が今までどのような人生を送つてきたのか、という事に関しては僕の興味は尽きなかつた。

それでも、ヒロミさんが自分から語り出すまでは過去については聞かないでおこうと思つた。なぜそう思つたのかと言つと、意識的にか無意識にか、ヒロミさんは自分の事を話すのを避けているのではないかと感じていたからだ。

彼女は話の流れをそれが自然な導きであるかのようにあるべきと

こうに誘つよつてひよつて言葉を選んでいるからとても分かりにくいのだけれど、ヒロミさんが僕の身近な話について意見を述べる時などに、彼女自身の体験談として何かを語るという事はほとんどなかつた。あつたとしてもじく最近の事か、当たり障りの無い日常の表層的な事に限られた。

なぜそういうのかは分からないのだけれど、僕はそれはひよつとしたら触れてはいけない事なのかもしれないと思つて余計な詮索はしない、という態度を一貫させる事にしたのだ。

ともすれば、僕のそういう態度が間違つた結果を生んだのかもしれない。

なぜ彼女がお手伝いも雇わずに独りでこんな広い屋敷に住んでいるのか、結婚はしていなかつたのか、僕は聞いてしまつた方が良かつたのかもしけない。後になつて思つてみれば、僕のそういう言つ一步引いたところからの接し方というのが、その頃の僕の周りに蠢いていた様々な問題の根本的な原因だつたのではないかと、ぼくはずつと、ずっとずっと途方も無い時間が過ぎてから、ようやく思い当つたのだ。

それでも僕は一つだけ、ヒロミさんと関係する事について聞いてみたのだ。

それはどうしても気になる事だつたし、聞かないわけにはいかない事でもあつたと言える。

「どうしてここには入り口が無いのですか？」

「いらないから」

「でも、困りませんか？」

「どうして？」

「だって、出入りするでしょう？　買い物に行く時とか、お客様が来る時とか

「そう頻繁に買い物になんていかないもの。時々草をかき分けて外に出て行くぐらい、大して面倒な話ではないのよ」「でも、お客様が来る時は？」

「ここに人は訪ねて来ないわ」

そう言つたときのヒロミさんの顔はいつまでたっても忘れられない。僕はそのとき付き合つていた彼女の顔はもうどうしても上手く思い出せなくなつてゐるのだけれど、この時、この言葉を発した瞬間に一度だけ見せたヒロミさんの表情は僕の記憶の深いところに深々と突き刺さり、二度と抜けない棘のようになつてしまつたのだ。そう、思えば僕はこの時から、ヒロミさんの過去については聞いてはいけないのだと思い込むようになつたのだ。

「僕は来ますよ」

僕は内心の動搖を隠して、可能な限りの演技力で平静を装つて言った。

「あなたは特別。とても変わつた人だもの」「僕は変わつてますか」

「ふふふ。変わつてるわ。ここに迷い込んで、私とこんなに仲良くなつてくれたのは、あなただけなのよ」

「僕は至つて普通にしているつもりなんんですけど」

「ふふふふ。ありがと」

何度もあつた事なのだけれど、僕はヒロミさんこそ「ありがと」と言われた理由が分からぬ事があつた。それが最近になつて龐がながらでも分かるような気がしてきたのは、僕もそれなりに歳を取つたという事なのかもしれない。そう思える。

急な転勤で僕がヒロミさんに別れも言えずその町を離れてから、もう何年も経つてゐた。また戻ってきた時には古瀬川邸の敷地はシンプルで巨大なマンションに変わつてゐた。僕はそのマンションの回りをぐるっと一周回つてから、その隣りの建物との間にはほんの

わずかな隙間も無い事を確かめた。おそらく建築法ぎりぎりの設計なのだろう。そこには人が通れるほど余裕のある隙間は無かつた。僕は壁の外からその狭い狭い隙間を覗き込み、それから目を閉じてどこまでも広がる緑の芝生を思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325d/>

抜け道 裏道 人の庭

2010年10月8日15時18分発行